

フィールドワーク便り

娯楽のための狩猟／密猟とされる狩猟

—カメルーン北部におけるスポーツハンティングと地域住民—

安田 章人*

「これは何の肉？」

「牛肉だよ」

私が2004年7月に初めて調査地を訪れたとき、村人は私に嘘をついた。

私はアフリカ中央部、カメルーン共和国の北部、ベヌエ国立公園に隣接する村で2004年から約19ヵ月にわたって、自然保護政策や観光活動が地域住民に与える影響に注目してフィールドワークをおこなってきた。カメルーン国内では、法律によって、地域住民による狩猟は、植物を材料とした道具によっておこなわれる「伝統的狩猟」に限って認められている。また、この地域には国立公園の周りに狩猟区が設定されており、狩猟区の中で狩猟をおこなうには、狩猟許可の取得と狩猟税の納付が必要とされている。地域住民に狩猟許可と税金のための現金を捻出する余裕などなく、彼らは違法行為と知りつつ、食べるため、そして売却し現金を得るために密猟をおこなう。これが、村人が私に牛肉であると嘘をついた理由である。

狩猟区内での地域住民の居住は認められるものの、実質的に彼らに狩猟権はない。では、誰がそこで狩猟をおこなうことができるのか？それは、スポーツハンターである。

サバンナの楽園とスポーツハンティング

雷鳴のように響き渡った銃声とともに、オスのバッファローは、その黒い巨体を揺らし、地面に倒れた。首を一発で撃ち抜かれたのだ。スペインから来たハンターは、満面に笑みをたたえ、狩猟ガイドとがっちりと握手をした。そして、私とも。狩猟ガイドは特殊なナイフで手早く解体し、2人のポーターはトロフィーとなる大きな角のついた頭部と胴体の皮を車まで運んだ（写真1）。

これは、私が調査地でスポーツハンティング、いわゆるスポーツや娯楽のための狩猟に同行した時の様子である。まさに、ヘミングウェイの著作「フランシス・マカンバーの短



写真1 バッファローを仕留めたハンターとポーター（筆者撮影）

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

い幸福な生涯」で読んだ、スポーツハンティングの描写そのものだった。

「スポーツハンティングの研究をしています」と言うと、聞いた人は、かつてアフリカが「暗黒大陸」や「猛獣王国」と呼ばれていた植民地時代を思い描き、「それはいまもおこなわれているのですか?」と尋ねる（写真 2）。スポーツハンティングは、現在も世界中でおこなわれており、なかでもアフリカ大陸は今も昔もハンターたちの憧れの地であり、ホームグラウンドである。現代でも約 18,500 人ものハンターがエキゾチックな野生動物を求め、アフリカにやってくるという [Lindsey *et al.* 2007]。ハンティングをおこなうハンター、そしてハンターを相手とし観光ビジネスをおこなう事業者は、ともにいわゆる欧米の富裕層である。事業者は、狩猟区を国から賃借し、ハンティングキャンプと呼ばれる宿泊施設を建設する。そのためには多額の資本が必要であるため、たとえばある事業者は海運会社の社長のよう、富裕層に属する人々である。ハンターは、キャンプの宿泊費や狩猟許可を取得するための税金な

どを一括して、事業者が経営する旅行会社に支払う。たとえば、カメルーン北部で事業をおこなうある会社の場合、その料金は 2 週間の滞在で渡航費を除いても 400 万円以上にもなる。そのため、ハンターも事業者と同様、医者、会社社長、弁護士など高所得者である。あるキャンプを訪れたとき、その事業者は、フランスの有名な自動車会社の社長令嬢とともに写った写真を誇らしげにみせてきた。

フィールドワーク中、私もハンターらが滞在するキャンプを何度か訪れたが、そこはまさにサバンナの真ん中に現れた「楽園」であった。ハンターらは、家族あるいは友人とともに、あるいは個人で、一般的に 2 週間ほどキャンプに滞在し、ハンティング旅行を満喫する。ハンターらは、欧米からの国際線と国内線を乗り継ぎ、北部州の州都ガルアにたどり着く。そこにはキャンプのスタッフがランドクルーザーで迎えに来ており、約 5 時間かけキャンプにたどり着く。

彼らの滞在中の一日は以下のようなものである。朝 4 時に起床し、軽い朝食を済ませ、トラッカー（足跡などから動物を追跡するスタッフ）やポーターとともに車に乗り込み、目当ての動物を探しに出かける。昼食はたいがいキャンプでとり、午後は、炎天下を避け、冷房の効いた部屋でシエスタをする。午後 4 時ごろに再び車で狩りに出かけ、日が暮れる前にキャンプに戻り、酒を飲みながらほかのハンターと今日の猟果について話す。そして遅めの夕食をとり、思い思いに過ごしたのち就寝する。



写真 2 1920 年代、現在のケニアにてライオンを仕留めたハンター [Eastman 1927]

キャンプは首都から 500 km 以上も離れており、携帯電話も通じず、電気、ガスなど通っているわけもない。30 km 離れた最も近い小都市には、政治犯を収容する刑務所がある。それはこの地域が陸の孤島であるためだ。そのような土地であるにもかかわらず、キャンプには温水シャワーや発電機、冷房が完備されており、出される食事もカメルーンの都市で食べるよりもむしろレベルが高かった。ある日の昼食は、メロンの白ワイン漬け、トマト・ピーマン・ジャガイモのサラダ、ハーテビーストとコブ（いずれもアンテロープの一種）のロースト・冷菜仕立て、各種チーズ、フルーツの盛り合わせ、食後のコーヒーというものであった。村でトウモロコシや落花生などしか食べていなかった私が、恥をかえりみずこの食事にがつついたのはいうまでもない。

キャンプは調査村の周辺にいくつかあり、訪れた私を「あんな村で村人と同じ生活をして大変だな」と歓待してくれた事業者もいれば、「帰れ」と門前払いをした事業者もいた。滞在していたハンターからも、物珍しそうな眼で見られ、「ゆっくりしていったらいい」と言ってくれるハンターもいれば、（こっちは高い金を払ってバカンスにきているのに…）と明らかに不快な顔をするハンターもいた。リゾート地に厚顔なフィールドワーカーがやってきたのだから、後者の反応はもっともであろう。このような状況の中、事業者やハンターに対してハンティングや村人の密猟について聞き取りをおこなう際、躊躇という文字が頭の中から消えることは一度もなかった。

「違法行為」を調査する

調査地に住む農耕民や牧畜民の生活は、欧米人らによる娯楽のための狩猟やリゾートのような暮らしとは対照的なものであった。私が滞在した A 村にはディー（Dii）と呼ばれる農耕民が居住しており、トウモロコシ、落花生、綿花を中心とした農業を生業の基本としている。村には十分な家畜がおらず、家畜の肉が売られている町からも離れているため、村人はタンパク源としてもっぱら野生獣肉に依存している。私は、調査を始めた頃から、村人は狩猟をおこなっており、村での食事で出される肉は野生獣肉であると確信していた。しかし、どの村人に何の肉かと尋ねても、彼らは警戒してウシやヤギの肉であると嘘をついた。このような調子で半年にわたる 1 回目のフィールドワークを終え、失意の底に沈みながら帰路についたことをよく覚えている。

その後、初めて村人たちから狩猟や野生獣肉について聞き取りがおこなえるようになったのは、2 回目にあたる 10 ヶ月間のフィールドワークの半ばを過ぎてからであった。私が再び村にやってきたこと、フランス語によるコミュニケーションもそれなりにできるようになったこと、そしてなにより長期間滞在し、村人たちと打ち解けることができたことが、彼らが狩猟に関して口を開いてくれるようになった大きな要因であろう。「アキトはもうこの村の住民だ」と村のおばさんに言われ、仲のいい若者には「今度、一緒に罫猟に行かないか？」と言われたときは、それこそ涙が出るほど嬉しかった。

娯楽のための狩猟／密猟とされる狩猟

何百万円も支払い、何千キロも移動して、娯楽のために狩猟をしにくるハンターと、密猟の罪で逮捕されることに常におびえながら生活のために狩猟をおこなう地域住民。「南北の経済格差」と一般的に表現すれば、このような対比は実感に欠けてしまう。しかし、両親とともにフランスから訪れていた子どもがキャンプでも本国とほとんど変わらない食事をしていることを観察したわずか 1 時間後、バイクで村に戻り、村でそのフランス人と年の近い子どもが残飯を兄弟とともに食べているのを見たとき、私はいいようもない感

情に襲われた。「豊かな生き方とは物質文明など生活水準だけで推し量れるものではない」という意見があり、私もそれに賛同するが、この絶対的な格差とは何なのか。研究を続ける私からこの問いが離れることはないだろう。

引用文献

- Eastman, G. 1927. *Chronicle of an African Trip*. New York: John P. Smith Company.
Lindsey, P. A., P. A. Roulet and S. S. Romanache. 2007. Economic and Conservation Significance of Trophy Hunting Industry in Sub-Saharan Africa, *Biological Conservation* 134: 455-469.

伐り残された木

—タンザニアの農村におけるムブラの木と人々の関わり—

山 本 佳 奈*

タンザニア南部のボジ高原は、かつてマメ科ジャケツイバラ亜科の樹木を主要な構成種とする疎開林（ミオンボ林）に覆われていたが、20 世紀初め、この地にコーヒーがもたらされると、ミオンボ林はまたたく間に開墾されてコーヒー園に変えられていった。今では私が調査している村でも天然林はほとんど姿を消し、季節湿地に囲まれたアップランドにはトウモロコシ畑とコーヒー園が広がっている。そのような景観のなかで、唯一伐られずに残されてきた木がある（写真 1）。現地

のニイハの人たちがムブラ（*mbula*、学名：*Parinari curatellifolia*）と呼ぶクリソバラヌス科（*Chrysobalanaceae*）の常緑樹がそれである。ムブラはミオンボ林の構成樹種のひとつではあるが、ミオンボ林以外の植生にも広く分布し、タンザニア全土でみることができる。ここでは、ニイハの人々とムブラとの関わりについて紹介する。

乾季の 8～9 月になるとムブラの実（ウルブラ：*ulubula*）が熟す。子どもたちは地面に落ちた果実を頬張りながら、高木の枝に

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科